

試験研究成果普及情報

部門	野菜	対象	普及
課題名:「とちおとめ」のポット育苗法			
[要約]「とちおとめ」のポット育苗では、収量性を重視する場合は口径10.5cmポットを用い、育苗に関わる労力及び面積を重視する場合は7.5cmポットを用いる。7.5cmポットでは、1鉢当たり窒素成分量で240mg施肥する。夜冷処理する場合は6cmポットを用い、180mg施肥する。			
キーワード(専門区分)栽培(研究対象)野菜類-イチゴ (フリーキーワード)イチゴ品種、とちおとめ、ポット育苗			
実施機関名(主査)農業試験場 野菜研究室 (協力機関)暖地園芸試験場 野菜・メロン研究室 (実施期間)1999年度~2000年度			

[目的及び背景]

イチゴ品種「とちおとめ」は、平成8年に品種登録され、大果・良食味で果実も硬いことから本県でも栽培面積が増加している。しかし、本品種の収量及び品質には生産者間の較差が大きく、生産性は必ずしも安定していない。そこで、「とちおとめ」の高品質安定生産を実現するため、本品種に適したポット育苗法を開発する。

[成果内容]

- 育苗ポットの大きさと生産力の関係を明らかにするため、ポットの口径を6cm、7.5cm及び10.5cmとして検討した。定植時の苗の大きさ、頂花房収量及び4月末までの総収量とも口径が大きいほど優った。収量性を重視する場合は、10.5cmポットがよく、育苗に要する労力及び面積を重視する場合は7.5cmポットも実用的である(第1図)、(第1表)。
- 育苗中の窒素施用量と生産力の関係を明らかにするため、口径7.5cmのポットを用い、1ポット当たりの窒素施用量を60mg、120mg及び240mgとして検討した。窒素施用量が多いほど花芽分化期はやや遅れるが、収穫開始期は遅れず、総収量は優った。育苗中の窒素施用量は第1次腋花房の収量及び総収量が最も優る240mgがよい(第2図)、(第3図)。
- ポットを用いた夜冷育苗においてポットの大きさと窒素施用量を明らかにするため、ポットの口径を6cm及び7.5cm、窒素施用量を60mg及び180mgとし、8月24日から9月14日まで夜冷処理を行い検討した。年内収量はポットの口径に関わらず窒素施用量が多いほど優り、総収量は窒素施用量に関わらず口径が大きいほど優った。多くの株を夜冷処理し、早期の収量を高めるには6cmポットを用い、窒素成分量で180mg施用するのが実用的である(第4図)。

[留意事項]

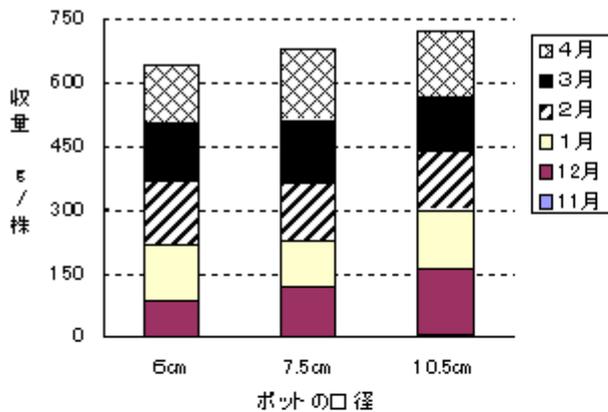
- 育苗中の窒素栄養不足により芽無し株が発生しやすいので、育苗後半も極端な窒素切りは行わない。
- 作業の遅れ等で適期に定植できない場合は、花芽分化確認後苗に液肥等で追肥を行う。
- 活着に時間を要するので、定植後約3週間はこまめにかん水を行う。
- 腋花房の収穫期を促進するため、厳寒期は最低夜温を8℃に保ち、電照を行う。

[普及対象地域]県下全域

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]

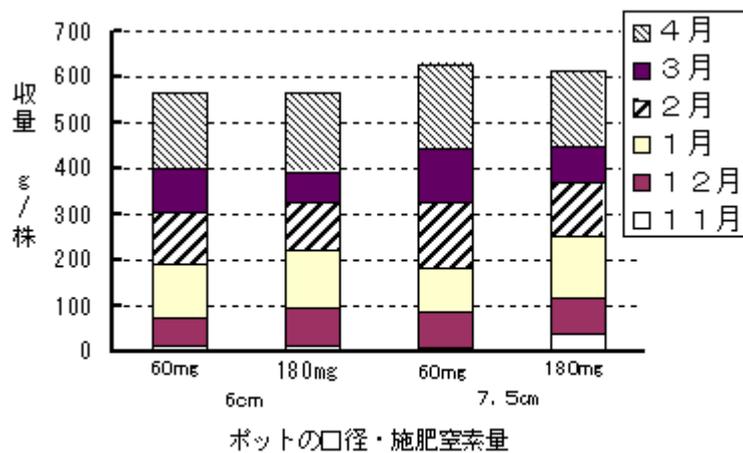
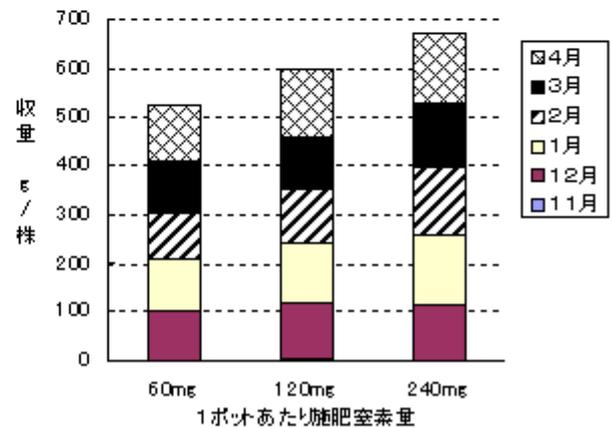
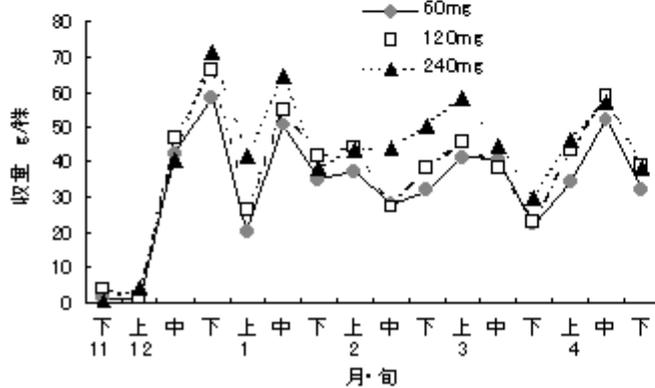


第1表 ポットの大きさ別必要培養土量及び育苗面積

ポット口径 (cm)	培養土量 mL/鉢	培養土代 L/10a (千円/10a)	育苗面積 (m ² /10a)
6.0	150	25.6	120
7.5	200	34.2	187
10.5	520	88.8	366

注) 10a当たり8,333鉢を育苗するとして試算。培養土は鹿沼土細粒:パーミューライト=1:1(容積比)。育苗面積は各ポットの口径分鉢間隔をとった場合の面積。

第1図 育苗ポットの大きさ別収量



第4図 夜冷育苗におけるポットの大きさ及び窒素施用量別収量

[発表及び関連文献]